

真言密教を中心とした聖教世界の研究プロジェクト
展覧会「中世の聖教と紙背」と廃寺復元作業

川嶋将生・源城政好・松本郁代・金子貴昭・古川耕平

概要 平安京遷都以来、1200年以上の歴史をもつ京都には、現在でも多数の寺社が存在する。かつて世俗的な権力や宗教的権威を誇示していた真言密教には、経蔵や宝蔵に僧の修学や密教修法などに関する聖教(しょうぎょう)が多数所蔵されていた。本プロジェクトでは、財団法人藤井永観文庫が所蔵する約420点の作品をデジタルアーカイブし、また、そのうち100点余ある聖教関係の内容を検討して、京都における真言密教に関する聖教の特質を明らかにする。なお本サブ・プロジェクトは「京都アート・エンタテインメント創成研究」のコンテンツのうち、「宗教・思想史」分野の一翼をになう。

Research of the *Shōgyō* (聖教Buddhist scriptures) in the Shingon Buddhism Project
The exhibition 'Buddhist Scripture and Medieval Documents from the Fujii Eikan Collection'
and the visualizing of ruined temples by CG techniques

Masao Kawashima Masayoshi Genjo Ikuyo Matsumoto Takaaki Kaneko Kohei Furukawa

Abstract Many temples and shrines have been built during the 1200 years of history since the relocation of the capital to Heian-kyo (now Kyoto) in 794.

Shingon Buddhist temples concerned with political power and religious authority in the medieval period made use of theories and practices of the *Shōgyō* (聖教the Buddhist scriptures), which were stored in *Kyōzō* (経蔵 a store of the scripts) or *Hōzō* (宝蔵 a store of the treasures).

The objective of this project is to digitally archive the collection of the *Fujieikan-bunko*, which stored about 420 items explaining the characteristics of over 100 items of *Shōgyō* material in the collection. These sub-projects are part of the "religious and the historical ideas" which fits in with the larger mission of the *Kyoto Art Entertainment Innovation Research*.

1、藤井永観文庫について

財団法人藤井永観文庫は、立命館大学出身の故藤井孝昭氏(1913~83)が生涯かけて収集された古美術品のコレクションで、氏の没後の1984年、コレクションの散逸を惜しまれたご遺族によって財団が設立され、その保全に力をつくされてこられたものである。

藤井永観文庫には、現在、古文書を中心として420点余のコレクションが所蔵されている。財団による内容分類は、宸翰、墨跡・古筆・古文書、

経巻、古典籍・刊本、仏画、絵画、工芸品、衣裳裂、拓本となっているが、この分類は箱書や外題等によって付されたもので、必ずしも内容を十分検討して行われたものではない。したがって本サブ・プロジェクトでは、1点1点の内容検討を行い、京都国立博物館で採用されている分類をもとに、改めて分類しなおす作業を行っている。ただし旧分類と対照できるような配慮も加えている。

2、資料の検討

内容の検討にあたっては、資料の真贋はもとよりのこと、原本か写しかなどの判断をするための作業を行った。また藤井永観文庫に所蔵される聖教類には、箱書などから、かつて東寺(観智院・宝菩提院)に所蔵されていたものが、何らかの理由によって外部に流出し、藤井永観文庫の所蔵に帰したと考えられるものが多く存在している。そのため、本プロジェクトでは、これらの資料がどこからの流出本であるのかの検討を行った。ただし、元東寺所蔵と考えられるものについては、最終的な事実確認と伝来の有無の判断は、東寺宝物館に委ね、現在の状態からできる限りの検討を加えた上で、確実に旧東寺伝来のものとして認定できた聖教は、現在のところ約20数点を数える。この点については引き続き調査を行っていききたい。

また醍醐寺にも東寺と共通する聖教が多数所蔵されている。従って、藤井永観文庫に所蔵されている聖教類の検討にあたっては、醍醐寺所蔵の聖教との比較・検討も併せて行っている。

3、藤井永観文庫とアーカイヴィング

現在、藤井永観文庫に所蔵されている東寺観智院や東寺宝菩提院など、東寺の院家(いんげ)にもともと伝来していた聖教のほとんどは、東寺に所蔵されていた当時の‘有り姿’のまま藤井永観文庫に伝えられたのではなく、掛幅に表装し直されたり、裏書や紙背がみえない状態となっているものもある。また、本来は1点の作品(オリジナル)であったものが二つ三つに分けられ、別々の掛幅として表装し直されているものもあり、さらに本来は、オリジナルの作品と同じ分類であるべきものが、表装され直した内容によって、一本は絵画に、裏書のもう一本は書跡にと、分類がオリジナルの分類とははぐれ、異なってしまう事態なども生じている。

これらの作品の表裏関係については、裏書の文字が表に薄く残っている部分を、デジタル画像を反転させるなどして解析作業を進め、部分

部分を照合させながら復元していく作業を進行中である。こうした検討作業の成果の一部は、のちに述べる2004年11月に開催した展覧会で公表した。

本サブ・プロジェクトでは、オリジナル(‘有り姿’)と異なる加工(表装などに代表される)が施された藤井永観文庫所蔵の資料に対しては、文化財とコレクション、という二つの観点を措定し、原資料に対する理解を進めている。

つまり、このような性質をもつ藤井永観文庫所蔵のアーカイヴィング行為の前提には、資料の収集と永久保全が挙げられるが、これらのデジタル技術に加え、学術的な資料として信頼されるアーカイブ資料を構築いくためには、本文庫の場合、伝来元から外部に流出し、何らかの加工が施された資料を、オリジナルの‘有り姿’にできる限り復元し、それを提示していくことも重要な作業であると考えている。基礎データを握る情報発信者としての責任は、重大である。次年度以降も継続的にこれらの作業と調査を行っていききたい。

なおデジタル・アーカイヴィング作業は、金子貴昭が担当した。

4、展覧会の開催

2004年度の成果報告の場として、2004年11月1日から19日まで、立命館大学アート・リサーチセンター展示室において、「中世の聖教と紙背一写経は神仏をかけめぐる。」と題した展覧会を開催した。

展覧会では、22点の作品を展示したが、全体を「聖教の表と裏」「写経と装飾」「修法と祈りの世界」に三区分し展示した(出品リスト参照)。また全出陳作品の画像と解説を付した図録(70頁)を作成したが(執筆担当は川嶋将生・源城政好・松本郁代)、紙背文書については、その全体像を画像で示したところに、この図録の最大の特徴があろう。また松本郁代(日本学術振興会特別研究員)の論説「中世の偽書・偽文書と聖教一空海に仮託された史料一」を掲載した。なお図録は入場者のうちの希望者にのみ、無料配

布した。

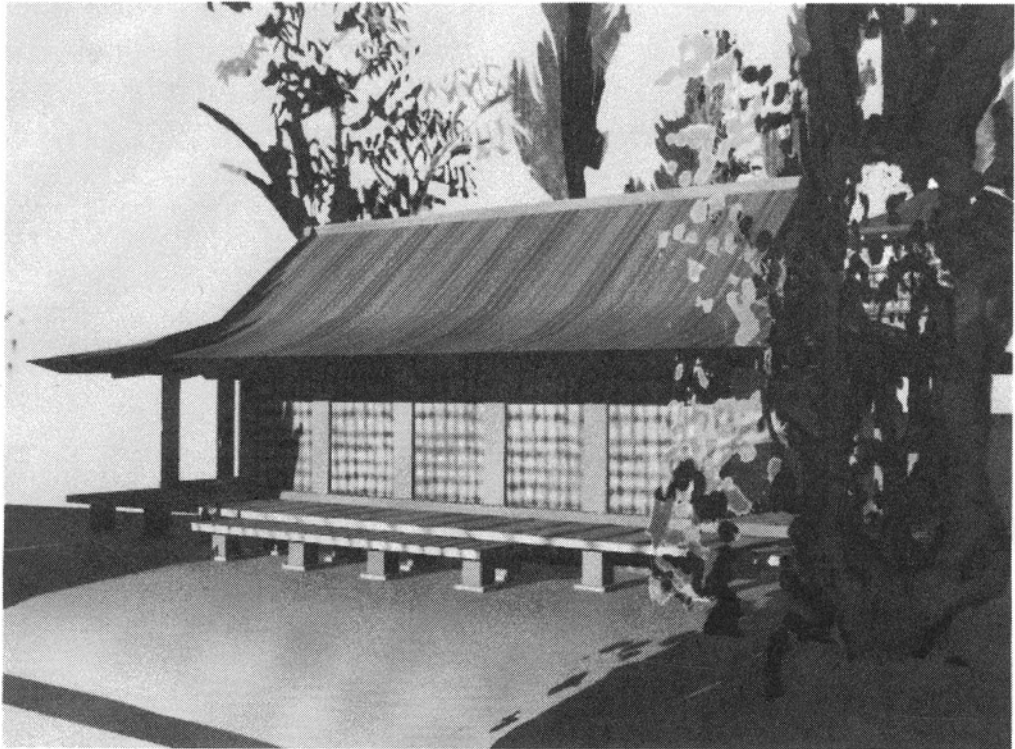
さて展示作品は、奈良時代の伝聖武天皇筆「賢愚経切(大聖武)」(一幅)がもっとも古く、以下、鎌倉時代が16点、南北朝時代が4点、室町時代が1点となっており、このうちには「明恵上人筆 護身法事」と「足利氏満筆 紺紙金字般若心経」の2点の重要美術品指定作品が含まれている。

展示では、現在は別々の作品として財団の目録に登録されているが、本来は、紙の表裏の関係であったものを復元し、また二つ以上に分けられる以前の本来の状態はどのようなものであったのか、などを工夫して行った。紙背は書状だけではなく、鎌倉時代書写の白氏文集や楽書・具注暦、南北朝時代の続歌など多分野のものを含んでおり、それだけに宗教史関係者だけではなく、歴史研究者や国文学者など多方面の専門家の高い関心呼んだ。

5、廃寺のCG化

ところで本サブ・プロジェクトではいまひとつ、廃寺のCG化作業を行っている。現存する寺社

のCG化は、権利関係など種々困難な問題を含んでいるが、廃寺については当然そうした問題は含まないし、何よりも、現存するものを目の当たりにするのは異なり、かつての寺容を現在に復元的に蘇らせることができる。ただしこの場合、史料が存在するかどうかなどの問題があり、したがって全ての廃寺が復元可能というわけではない。今年度は、鎌倉時代中期の権力者、摂政九条道家によって、現東福寺東側の山中に建立された光明峯寺について、その作業を行った。光明峯寺は、真言宗の聖地高野山を模して建立された、いわば高野山金剛峯寺のミニチュア版というべき寺であったが、15世紀半ばころには廃絶していた。しかし幸いにも、1250年の「九条道家初度惣処分状」などの史料が残されており、そこには光明峯寺の諸伽藍やその規模など、詳細な内容が記されている。これらの史料を手掛りにして、今年度は同廃寺の推定復元をおこなった。担当者は松本郁代と古川耕平である。次年度以降もかつて東山に存在した、幾つかの廃寺について、同様のCG化作業を行っていきたいと考えている。



光明峯寺のC区(部分)

